ベン・バラン兄弟のこと　（続き）

ベンさんが事故に遭ってから、７年ほども経った頃でしょうか。私は、自分たち家族の、旅行書類や在留許可証の申請など、身分に関わる書類一切を預けていた旅行社から、フィリピンの永住ビザを取ってみてはどうかと、強く勧められました。長期滞在をしている外国人の内、フィリピン政府が選別したいくつかの国から来ていて、その滞在がフィリピンに益をもたらすと判断されたならば、特別に永久ビザが支給されるというのです。ただし、各国に割り当てがあって、審査はかなり厳しいという。フィリピンに骨を埋めるつもりでいた私は、「優秀旅行社」の推薦で、その枠に応募してみました。

聞くとその審査はとても厳しく、なんと本人が裁判所に出頭し、正式な裁判を受けなければならないという。そのための必要書類は、すべて親切な旅行社が、無料で引き受けてくださった。クリスチャンの経営する旅行社で、私がやっていることを、かなり良く理解しておられたのです。私はその親切に甘えて、定められた日時に、マニラにある大きな裁判所に出頭しました。旅行社の人も来てくださいました。

驚いたことに、それは本格的な裁判でした。裁判長が真ん中に、二人の判事が両脇に座っていました。検事席があって、少し若めの検事が席に着いていました。私は被告席（？）に立たされ、検事の鋭い質問に答えなければなりませんでした。それから、私の横には、かなりの年配の弁護士が付いていました。幸い彼らは、すべて英語で裁判を進めてくれたので、何か難しい法律用語は別にして、大体の成り行きがわかりました。検事は、私の仕事についての説明はわかったが、それを証明するものが一切ないから、それを準備した上で、再審しなければならないと言っているらしい。

それで裁判長が私に尋ねました。「あなたの働きがここに記述されているとおりかどうか、証明をすることができるものを持っていますか？」ちょうどその時、私の車には、段ボール箱一杯の写真が入っていました。みな、私の山奥の活動を撮ったものです。日本の教会に私の活動を報告するためのものでした。そろそろ整理をしておかなければと、時間のある時アルバムに貼り付けようと、持ってきていたのです。フィリピンのお役所仕事は、とにかく時間がかかりますので・・・とは裁判官には申し上げませんでしが・・・。本当のところ、びっくりしたことに、裁判はきちっと時間通りに始まったのです。

命令されて持ち込んだダンボール箱一杯の写真を、３人の裁判官と検事と、弁護士が、何やら長いこと話し合いながら、比べあったり、回し見しあったりしながら、調査をし続けていましたが、ついに裁判長が尋ねました。「これら

の写真はなんのことか、説明してください」。それは、ベン・バランさんをマニラの病院へ連れていくため、ひどく急な道なき道を通って、彼をシーツで作った担架に包み、運び出している一連の写真でした。私は彼のことを説明しました。そして現在、彼はまだ生存していることも、いまは英語で話し、子供たちは学校に通っていることも、みんな話しました。

　裁判官たちと、検事、弁護士は長い間議論をしているようでした。そして結審しました。弁護士は満面の笑みで言いました。「佐々木さん。あなたは勝ちますよ。判決はしばらく後に出ますが、あなたの住んでいる場所の距離を考慮して、あなたが判決に出頭する必要はありません。旅行社の方に連絡をしておきます。良かったですね」。

　こうして私は、日本人で永久滞在ビザを獲得した、第一号になりました。フィリピンでビジネスをしている多くの日本人が、このビザを高額で買いたいと言っていることも聴きました。なんでもありの当時のフィリピンですから、そんなこともできるのかなと思ったものです。

　ところが私は、このビザを実際に手にすることはありませんでした。次男の病気のため、急遽帰国しなければならなくなったためです。その後、私はずっと日本に住み続け、牧師として働いてきました。ベンさんの話は、いろいろな人に語り聞かせ、大きな励ましになりました。私は毎年、随行者たちを連れてフィリピンを訪れては、ベンさんに会っていました。

　昨年、２０２５年の１月にも、フィリピンを訪れました。でも、うまい具合に日程を調整できず、ベンさんたちに会うことはできませんでした。私は今、直腸癌の手術を受け、４年を過ぎたところです。手術のあと、さらに肝臓に転移したステージ４の末期癌がん見つかり、もう手術も不可能で短い余命宣告をも受けました。大阪にある最先端の肝臓癌の専門病院で、セカンド・オピニオンも得たのですが、結果は同じでした。もうその余命宣告期間はとうに過ぎています。そして、主治医には内緒で、今月の末には、またフィリピンを訪れる予定です。フィリピンで死んだら、山の上の信徒の土地に埋葬してもらうことにしています。ところが、コビッド１９のために多くの死者があったとかで、バギオ市にはいくつもの火葬場が出来たそうですので、そちらの方が都合がよさそうだと、話し合っているところです。

　でも、今回は何としてもベンさんの家族と、前の奥さんの子供たちにも会いたいと、予定を組んでもらっています。実現したなら、もう言うことはありません。

　自分のことを長々と書いて、ベンさんのことはまだ何も書いていません。もともと鈍かった私の脳の活動はますます衰え、体も思うようには動きません。指は震え、ワープロを打つのにも、以前の五倍以上も時間がかかります。１０

倍かな・・・・。でもどうしても書いておきたいことがあるのです。

　私も８１歳を過ぎて、ずいぶん物の見方というか、考え方が変わって来ました。本当に、ベンさんの前の奥さんには、申し訳なく思うようになりました。何故かというと、私は彼女に良い感情を持てないでいたからです。植物状態になった夫を見捨てて、子供たちを連れて、健康な男の下に走ってしまったからです。

　私自身は、彼女の姿を思い出すことはできません。彼女たちが住んでいたナトブランは、少なくても、私の住居から車で４時間ほどはかかりました。事故が起こったのは、彼女が教会にきて間もなくのことです。私はあったことがるのかどうかも確かではありません。あるいはビデオのどこかに写っているかもしれません。でも、本当に彼女の姿を見た記憶がないのです。

　私はベンさんのことについて話すとき、いつも彼女のことは殆ど無視して、子供を連れて他の男に走ってしまったことと、倒れてきた枯れ木に打たれて、その男と共に死んでしまったことだけを話していました。私は、彼女が教会に行き始めて、本当にクリスチャンになったのかどうかも、知りませんでした。「植物人間になった夫を見捨てていった女」が、私にとっての彼女だったのです。

　でも昨年。そう昨年の中頃でした。私の中に、彼女に対する別の見方が生まれてきたのです。事故から４０年以上も経ってからです。牧師としては恥ずかしい限りです。そして、彼女に対して、申し訳ないことをしてきたと、また臍を噛む思いが一つ増えたのです。

「彼女は、本当に植物人間になった夫を見限って、健康な男の下に逃げたのだろか。違うのではないだろうか・・・・」。私は何度も思い返しては考えました。あの厳しい山の上に、夫と共に引っ越しをしてきて、雇われ農夫として働く夫と、貧しくも幸せに生きて来たのに、突然の事故。植物状態になった夫。二人の子供たちに加えて、事故後に生まれた乳飲み子。誰も頼ることができない中で、これからどのようにして生きて行ったらいいのか、彼女は泣くこともできないほど、苦しんだのではないだろうか。

　もちろん私たちが、彼女たち一家の支援をしようと必死に考え、努力していたことなど、思いもよらなかったことでしょう。自分たちが開拓した教会総出にして援助体制を組み、日本のクリスチャンたちにも訴えて、などと思いをめぐらせているたことなども・・・・教会にきて間もなくの彼女に解かるはずがなかったのです。彼女には、どんなに考えても解決できなかったはずです。苦しみや悲しみには非常に強い、イゴロット魂をもっても不可能だったはずです。そんな時に、彼女だけでなく、彼女の子供まで世話をしようという男が現れたら、なんと考えたでしょう。思いは千路に乱れたことでしょう。

彼女は、とても夫を愛していた。仲睦まじかった。それは彼女たちの生活を知っていた、ナトブラン教会の信徒たちに幾度も聴いていました。「彼女は夫を捨てたのではない」私の中に、突然そのような理解が生まれたのです。「彼女は、自分の夫を愛していた。愛していたからこそ、あたかも夫を見捨てるような行動をとったのに違いない」。「夫は必ず、自分の行動を理解してくれるはずだ」と思ったのかもしれません。

そして、夫のベンさんは、彼女の行動を理解していた。そう感じます。だから言えたのだ。「主は与え、主は取られる。主のみ名は褒むべきかな」。涙も流さず、そう言えたのだ。夫と一緒にいたら、自分たち全員に生きる道はない。社会保障がだいぶ整ってきた日本でも、彼女のような状況で生きるのは過酷です。フィリピンの、ましてや、取り残されたように生活していた、当時の山岳民族です。

彼女は愛する夫との間に生まれた子供たちを生かし、育て上げるために、敢えて、他の男性に走ったのです。夫を愛していたために、夫との間の子供を守りたい、どんなことがあっても、守って行かなければならないと考えたのです。そのために、新しく現れた男にも、できるだけ良い女性でなければならない。彼女は母としての情を本能的に表したのです。

彼女は必死に考えたのです。決死の覚悟で考え抜いたのです。夫と、夫の間に生まれた子供たちのために、自分はどうなってもいいと、健気に、一途に思ったのです。そうして、夫への愛を全うしたいと、思い至ったのやも知れません。彼女は、たとえ他人がどう思い、どう非難し、どう蔑み、どう嘲笑い、どう責め、どう排斥しようとも、忍んでいこうと決心したのです。すべては愛する夫と、その間にできた子供たちのために。

いま私が綴ったことは、そうであったか、そうでなかったかの問題ではありません。私がそのように思えるようになったのです。そして彼女を尊敬し、彼女を受け入れる気持ちになったことが重要なのです。神様は、すべてのことをご存じです。そして行動してくださいます。神様はご存じの上、彼女と新しい男とを取り扱い、事故で死ぬのをお許しになったのです。

私は長い間、あの事故は、神様の裁きの手が下ったものであるかのように感じ、ただただ黙っていました。しかし、あれは神様の裁きの手ではなく、神様の哀れみの手、助けの手、救いの手であったのではなかろうか・・・・と思うようになったのです。それは、永遠の命への救いの手ではないかもしれません。でも、彼女たちへの憐憫の表現だったのではないでしょうか。

私はベンさんの亡くなった奥さんにも、そして彼女を連れて行った男性にも、神様の哀れみがあるものと・・・・聖書のより厳密な理解から・・・・堅く信

じています。それは西欧のキリスト教の伝統的解釈とは違います。いまの、正統的神学とも違います。でも、聖書の教えをにれがむ（反芻する）程に、そのように思うのです。

　神さまの正義の裁き、公平なお取り扱い、裁きの後からでさえ、滅びに落とされた人々さえ、正しくお取り扱いになる神を思うごとに・・・・、見た記憶のない彼女が、美しい女性であるように、思えて来るのです。